

二級町村洞爺村誕生

優良自治団体表彰受ける

大正九（一九二〇）年、五月五日、虻田村から分かれて洞爺村が誕生しました。六月一日午前十一時半から洞爺村開庁式が行われ、祝賀会には三隻の発動機船を浮かべ中島を周遊し、旗行列をして祝いました。

【大正九（一九二〇）年、第一回国勢調査が行われ、五四四戸、人口三三二〇人。】

大正十二（一九二三）年、壮瞥村の一部の字美利加別以西（川東・岩屋）が洞爺村に編入され、同年、電話も開通しました。

【大正十四（一九二五）年、第二回国勢調査は五八一世帯、人口三四三一人。】

北海道では、昭和五（一九

三〇）年の豊作による農産物

価格の大暴落、昭和六（一九三一）年、七（一九三二）年は連続凶作により、基盤の弱い農村の危機は深刻になってきました。

国は農村の疲弊を救い、国民の生活の安定を重要課題とした方針を打ち出し、道庁は「経済更生計画」を定め、全道各町村に奨励するとともに洞爺村、栗沢村など、十八町村を「特別指導町村」に指定し、モデル町村としての指導と育成を開始しました。

純農村として発展してきた本村にとって、経済の建て直しは切実な課題であり、指定を契機に、分村以来低迷が続いた村に活力と更生への自信を植え付けて行きました。

特別指導村としての努力と成果が認められ、昭和十三年には優良自治団体として、内務大臣表彰を受けることとなりました。

【昭和十（一九三五）年、第四回国勢調査、五一八世帯、三

一八八人。】

昭和十一（一九三六）年、洞爺アスパラガス組合ができた。結成式が行われ、本村でアスパラガスが換金作物として栽培されるようになりました。

昭和十二（一九三七）年から日中戦争が始まり、本村にも召集令状が届く時代となり昭和十六（一九四一）年、太平洋戦争に突入、米英映画の上映禁止、昭和十七（一九四二）年、食塩、味噌、醤油の配給制、衣料切符制が始まり悪名高い「欲しがりません勝つまでは」という言葉も生まれました。

そのような中、昭和十八（一九四三）年、改正市町村制が実施され、二級町村制は廃止となり、内務大臣の指定町村となり初めて助役が置かれました。

昭和二十（一九四五）年、

終戦となりましたが、同年全国的な凶作により食糧事情の極度の悪化で各地にヤミ市、食糧の買出しなどで列をなす混乱期があり、その後食糧増産、農業技術向上の活気に満ちた戦後復興期を迎えます。

同年、新選挙法が成立し、婦人参政権が与えられました。本村でも昭和二十二年（一九四七）年、七年ぶりに村議会議員選挙が行われるとともに、初代公選村長が誕生しました。

【昭和二十一（一九四七）年、臨時第六回国勢調査は、五九二世帯、三六三九人。】

それまでの農業会は昭和二十三年（一九四八）年農業協同組合に衣替えし、昭和二十四（一九四九）年、大原、香川等の集荷倉庫新築、昭和二十七年（一九五二）年、トラクターを導入した耕土改良事業、昭和三十一年（一九五七）年、雑穀乾燥工場建築など生産増加と品質向上に努めました。

戦後復興

食糧増産と農業技術向上

